

多様性の時代

長万部町立長万部中学校3年 ^{しのだ} 篠田 ^{すずほ} 涼帆



私には苦手な言葉があります。「普通」です。

「普通はそんなことしないよ。」

「普通では考えられないな。」

私もそのような言葉を言われることがよくあります。そのたびに、「普通とは何なのか？何ををもって普通といえるのか？」とよく考えます。

なぜ私が普通という言葉が苦手なのか、よくよく考えると、三つの理由が考えられました。

一つ目は、私自身の中で、普通から外れる恐怖感と、普通であるという安心感が生まれることです。

「普通できるよね？」

「なんでできないの？」

と言われると、私は普通ではない、と否定されているような気持ちになります。そして、それは、裏を返せば、普通であることに安心しているということなのです。「普通に選ばれていて、本当に自分のやりたいことができているからつまらない。」と私自身思いますが、やはり、周りの目が怖くて、普通なるものにあてはめようと必死になる自分もいます。「普通」とは、人を安心させたり、否定したりできる、難しい言葉なのです。

二つ目は、「普通はありえない」などという言葉が、言った人の価値観を他人に押しつけてしまうからです。その人の思っている普通を相手に押しつけて、すべての人が同じ価値観になれば、すべてがその人の思い通りに行くかもしれませんが、それは絶対にいけないことだと私は思います。まだ世界のすべてを知ったわけではないのに、「普通はそうする」だの「普通はそんなことしない」だのと語ってはいけないのではないかと思います。

三つ目は、「普通はできるよね。できない理由が分からない。」「こんなの普通でしょ。」などと言うことで、完璧主義になってしまうことです。上を目指すことは全く悪いことではありませんが、人それぞれ普通の価値は違うのです。その人にとって少しハードルの高いことをできない人に要求して「なんでこんなこともできないの？」と言うのは違うと思います。そのような

能力の差があり、考え方の違いが全ての人にある、ということが普通であり、あたりまえなのです。

ただ、「普通」と同じくらい「多様性」も難しい言葉だと私は考えます。多様性を認める時代である現在、間違っただけで解釈しているなど思うことがたくさんあります。

現実の生活の中で、何かに挑戦する場面に、弱い気持ちである「諦めの気持ち」や「甘えの気持ち」を出したり、認めたりすることは多様性ではないと考えますし、困難や少しの壁で「私はこれが苦手です。できません。しかしこれも私の個性なので仕方ないです。」と言うのも、多様性を認めているとは言いません。

「教室で鬼ごっこするのも多様性」、「宿題やらないのも多様性」ではないのです。

また、何事も他人事と考える放任と、多様性は違うと考えます。私は政治家がニュースやSNSで批判されているのを見て、「そんなに怒らなくてもいいじゃないか。」と思います。しかし、それは今の私にとっては重要ではないこと、他人事であるだけです。

「仕方ない」と諦めるのは違う、「私には関係ないし」と他人事になるのも違う、「許してちょうだい」と甘えるのも違う、となる時、多様性との境目ってどこだ？となります。

私が考えるに、多様性とは考え方や能力が自分とは違っていても、「おもしろい」と認められることだと思います。ちがう人のちがう考え方や、できること、できないことも「おもしろい」と認めることができれば、社会がもっと豊かになるのでは、と思います。

結論として、「人間には性別や見た目だけでなく、考え方や能力にも多様性があり、それを普通という言葉でまとめてはいけません。多様性とは、ちがうところもおもしろいと認められること」というのが私の主張です。

普通について見つめ直して、多様性を認めてこそ、生きやすい『多様性の時代』になると思いませんか？